



Canary

ミュー

わすれた唄をおもひだす



眩しい。なんだ？

最初に見えたのは一面の白に等間隔に並ぶ円形のライト。白色灯が刺さるようだ。それは天井を見上げていたからだと気付く。仰向けで、柔らかな掛け布の感触が肩に軽い。数度瞬きをするうち、自分の呼吸が意識させられた。

「…？」

何も聞こえない。声帯は震えない。舌はある。歯もある。痛みはどこにもない。しかしどうもぎこちない。肉体が意識と歯車一つずらして動くような違和感がある。力を入れ、肘をつく。思ったよりも楽に上半身は寝台と垂直になった。手を見る。人の手だ。半袖から伸びる素肌は日を浴びず久しいのか生白い。掛け布を捲る。足だ。丈の短い下衣から飛び出た左右の五指は意図した通りに動く。掌で確かめる。腹。背中。

肩。そして顔。血が通った肉と骨。傷はない。熱もない。

白いシーツと白い枕。薄桃の毛布。白い壁。天井に九つの光源。窓はない。扉は一つ。空気は乾いても湿つてもいない。暑くも寒くもない。

はて、ここは何処だろう。

怪我人ではない。病人でもないだろう。安静にする理由は、今の僕には見当たらない。とりあえず立つてみる。うん。裸足で踏んだ床は冷たくはないが僕の肌よりは温度が低い。歩くとぺたぺた音がする。見下ろすベッドのくすんだパイプや全体の色合いは、やはり病室らしい様相だ。しかし、普通部屋の中央に置くだろうか。窓が無いから、どこにあつても構わないが。

壁は床と同じ温度。さらりと硬質で、何となく手のひらを滑らせ壁伝いに歩いてみる。迷路なら、時間はかかるがこれで出口までたどり着けるだろう。しかし今の僕がいるのは、道すらない立方体の室内だ。無意味な行動だが、僕は無意味が嫌いじゃない。

正方形の三辺を通過し、最後の一辺の中間で立ち止まる。ただ一つの出口であろう

扉。銀のサッシ。丸いドアノブ。鍵穴はない。

右手で握った金属は、部屋の中にあるもので最も温度が低かった。

ガチャ、ガチャガチャガチャ。ガチャ。

開かない。

「…」

右に回して押した。左に回して押した。左に回して引いた。右に回して引いた。回さず押して引く。引き戸のように左右に振り、シャッターのように上下に持ち上げ降ろそうとしてみる。汗が一筋、こめかみから顎を伝い床に落ちた。

びくともしない。

ここは何処だ。どうして僕は此処にいる。なぜ声が出ない。いや、それより。

そう考える僕は、一体誰なんだ？



扉は、一日一度外側から開く。僕のいる場所が内側だとするならば。

この場所で目を覚まし数時間、開くことを諦めていた一枚板は蝶番を鳴らしあつけないで開いた。僕はぼつかり空いた黒い長方形をベッドにだらしなく座ったまま見た。じつと待った。肘を乗せた膝が痺れるほど時間が経過しても、暗闇からは何も出てこない。何も聞こえない。僕はひたひた裸足を踏み出し、扉の手前で奥を覗き込んで見た。細い通路だ。室内の光源で、通路の左右にまた扉があるのが見て取れた。音はない。進む。暗い。二つのドアを左右に構え、僕は気付く。さらに奥、通路の行き止まりにもう一つの扉。どれから、と考え、僕は正面のどん詰まりに手を掛けた。

開かない。

そんな気はした。後ろ脚に戻り。まず右。開いた。隙間から光が零れる。中は白い。が、何のための場所かは明確だ。ユニットバス。手洗いに水洗便器と白いシャワーカーテン。バスタブの影が見える。鏡はない。

方向転換して、反対側。こちらもあるつけないで開いた。木製のテーブルが一つ。イスが一つ。流し。コンロ。冷蔵庫。ダイニングだ。

なるほど。食事と排泄と洗体。これから生きていくならば、必要な作業ではある。

今の僕は、どこにも用はない。

そういえば、と開ける努力を一通りしたドアに戻り検める。開いた状態で壁に固定されており、両手で力を入れても全く動く気配はない。融通の利かない扉だ。

ベッドに戻り、仰向けに寝転び足を組む。白い光を凝視して考える。

ここは何処だ？

Canary 1

唄を忘れた金糸雀は 後ろのお山に捨てましょか

いえ いえ それはなりませぬ

「調子は？」

伊奈帆が聞くと、スレインが珍しく口角を上げ笑みを漏らした。翻る右手。親指と人差し指が伸びた手の形。擬音を想像するなら「バン」だろう。

「いつ言うのかと思った」

二人の間には、動きを止めた盤面の配置。手の中の黒はキング。確かに。一局終えてようやく口を効くなんて、変な話だ。理由もないのだから、尚更。

「初めて、お前を無口だと思ったよ」

今日は機嫌がいいらしい。この場所で季節を四つ数え、そのくらいのことは分かるようになった。

「僕の調子じゃなくて、君の調子だよ」

スレインはボードを傾け駒をジャラジャラばらまきながら、聞こえるように鼻を鳴らした。

「生きている。それじゃあ不服か？」

伊奈帆は横倒しに転がった白と黒を、交互に摘み上げケースに並べる。スレインは頬杖をつき足を組んでいた。静かな時間。伏した目が交わるのは人差し指の爪先。

彼の目は追っている。どれをどの順番で並べるのか。

白のビシヨップ。

最後のピースが収まり、蓋を閉じた。

「十分だよ」

話もできるしチェスもできる。今はそれで十分だ。

□

「調子は？」

両手が芝居がかって広がった。

「見ての通り。生きている」

□

「調子は？」

くすりと漏れたのは温度のある笑い。

「ほら。生きてるぞ。死んだふりでもしてやろうか」

□

「調子は？」

笑窪の場所、絆創膏に皺が寄る。

「悪くない」

□

「調子は？」

顔を顰め、不味そうに吸い込む空気。

「ああ、心配いらない」

□

「調子は？」

かち合う視線。揺れる碧。

「お前の方こそ、調子はどうだ」



「調子はどうだ？」

少し掠れた、柔い声。

「」

何と答えたのだったか。



生きるというのは無駄が多い。無駄こそ生きると言うことだろうか。こんな場所では、出口のない思考の迷路に陥ってしまう。ただ息をして、脳味噌を捻り出すように考えを巡らせているだけ。動かなくても腹は減り、爪は伸び、意識は眠りによつて途

切れる。食えることか眠ることをしなければ、きつと死ぬこともできるだろう。今の僕がこの世界に必要なとは思えない。空気を吸うだけ無駄だ。しかし何故かそうする気にはなれない。生きたいわけではないし、死への希求も無くはない。しかし名前も顔も思い出も忘れた僕が覚えているらしい生への行動。嫌々栄養を詰め込み、悪夢の予感を感じつつも瞼を閉じる。その行動を取らざるを得ない衝動に似た何か。何かの糸口になりそうで掴もうとするが、するりと逃げられ四散する。

変な話だ。こんなことを何度考えても、自分の顔さえ思い出せはしない。

怠い体を起こし、ダイニングへ向かう。開け放たれた扉。一体誰が何のために。それも無駄な思考だ。考えても分からないのだから。

冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターとゼリーパックを取り出す。イスを引くと脚がギ、と音を立てた。前は立ったまま摂取していたが、僕には時間が有り余っていることに気付き、座って口に入れるようになった。

もう何回目になるか。この場所で甘く冷えた携帯食料を飲み下すようになり。

五つ。これが冷蔵庫の中のペットボトルとパックの数。他には加工肉と生卵。数種

類の生野菜が保存されている。ベーコンやソーセージはともかく、卵や野菜は時間が経てば腐りそうなものだ。僕は調理をしないし、興味もない。だからこの食材の数々はこの世で二番目に無駄なものだと言える。

空のボトルとパックを捨てようと立ち上がる。しかし足が止まる。

匂い？

何の匂いだろう。嫌ではない。ダストボックスに近づき覗く。いつもは何も入っていない。箱にかけられた透明のビニル袋の底。

「…？」

緑色の細かい葉。濡れている。植物の香りだ。この匂いを嗅いだことはある。そんなに多くはないが。確か。把手のないカップに入った薄緑の液体。かかる軽い声。

『猫舌？』

ああ、これはお茶だ。



ユニットバスというのは、どうも性に合わない。

きゅ。きゅ、きゅ、きゅ。

浴槽の淵を意味もなく擦る。清潔で垢一つない。ここに来てから僕は掃除をしたことがない。風呂だけではなく、洗面台もトイレも向こうの部屋のキッチンも。誰かがバスタブを便器を床を磨き、キッチンの洗い物やごみを片付けているらしいことが分かる。理由はいろいろ思いついたが、どれも決定打に欠ける。今僕が分かることとは、僕は健康そのもので、風呂も食事もある程度楽しめる精神状態だということだ。名前も顔も過去すら失っても、人間案外丈夫なものだ。

湯がぬるくなつて、肩が寒い。追い焚き機能があればいいのに。長湯を諦めて栓を抜く。タオルで体を拭きつつふと気づく。

石鹸がすり減っている。

贅沢なことに、このバスルームにはシャンプー、コンディショナー、ボディソープ、ハンドソープ、固形石鹸が常備されている。手洗い台にハンドソープと固形石鹸。僕

はハンドソープで手を洗う。泡で出てきて便利だから。昨日まで真新しい状態だった白い石鹸は、角がなだらかに丸い。乾いてはいるが、使用感は明らかだ。ふと手に取る。手の中に収まる白い塊。

手の中から滑り落ちる映像。

『…笑うな』

あれは、僕の手じゃない。



思い出す、という行為は自分を作り出すようなものだ。時は戻らない。記憶は主観であり、結局自分の都合の良いようにしか認識できない。何度試みても失敗するのは、僕の所謂思い出というやつには都合の良いことが全くありはしないことの証明かもしれない。自分らしさをデリートした結果、僕は名前も顔も失った。こんなしょうもないことを考えるのも、他にすることも無いからだ。

僕の脳はきれいさっぱり掃除されたようだが、この施設は少し違うらしい。やり残しがある。

あの茶葉は、わざと残した。僕に気づかせるように。

誰かがいる。僕の他にも、同じように隔離された誰かが。きっと、あの突き当りのドアの向こう。僕は想像する。その人物が僕のように白い部屋に一人でいて、溺れるような無音の時間地獄を味わっている。バスルームで体を洗い、トイレで排泄し、ダイニングで食事を摂る。その人物は、調理をするのかもしれない。茶を淹れるとは、なんとも長閑な発想ではないか。

僕の部屋が閉ざされる間、向こうの扉が開くのだろう。



石鹼がピンポン玉ほどの大きさになった。

やはり、僕の他に誰かいるようだ。管理者ではなく、同じ立場の、おそらく被験者。

それはもう確定だろう。僕は何らかの実験がこの施設で行われている。だとしたら人権も何もあつたものではないが、治療目的である可能性も残っている。記憶と声。回復の兆しはない。

石鹼で手を洗う。その手の形を想像する。転がす手の動き。水に濡れた手が徐々に泡で覆われ、指の間、掌、手の甲、手首の真白い泡の軽やかさを思う。その手は白く細い。指の関節が出っ張って、血管が青く透け繊細に盛り上がり。面積の広い爪は深爪が過ぎるほど短く切り揃えられ、その手が白い石鹼から白い泡を生み出す。

鮮明に脳裏に浮かぶ白い手。
あの手は、誰の手だろうか。



「…?」
皿。

皿などというものがここにあったとは知らなかった。冷蔵庫の下段中央に鎮座した白い皿を慎重に取り出す。黄色い。これは卵料理の一つだ。どのように訓練したのか、薄く焼いた卵を幾重にも巻く調理法の産物だ。僕は何故、そんなことを知っているんだらう。

奇妙な生活が始まりもうずいぶん経つ。鏡はないが、髪が指で梳けるほど伸びた。肩に乗る頭髮の色はくすんだ金。そうか。これが僕の髪か。飽きて放られた人形のような色だ。

その卵の成れの果てをひとまず見る。数度の実証を試みた結果、僕に料理をするスキルが備わっていないことが分かった。卵を割ると粉々になるし、ベーコンを焼くとするとき炭になる。皿を洗うと泡が飛び散って目に入り、コップは落として破片で足を切った。大人しく、ミネラルウォーターとゼリーを摂取することにしたのは昨日。この皿は、管理体制を免れた。いや、違う。わざと残された餌のようなもの。これに反応することは危険かもしれない。しかし、漠然とした危険より好奇心が勝った。見たこともない開かずの扉の向こう。そこにいるかもしれない人と思う。この卵を焼い

たのはそいつだ。絶対。お茶を飲んだのも、俎板に筋を作ったのも。手を合わせる。こんな習慣、僕にあつたんだな。何に祈るんだったつて。ええと。手と手を合わせて。

『いただきます』

そう。命を頂くのだからと。それを言ったのは誰だったか。

噛む。やわらかい。甘い。味わい深い、微かにしよっぱいこの味。

初めて食べたんじゃないのか。僕は。どうして涙が出るんだろう。

Canary 2

唄を忘れた金糸雀は 背戸の小藪に埋けましよか
いえ いえ それはなりませぬ

らしくない。

自分の事など、どうでもいいと思っていたが。まさかこんなことになるとは。

「あ」

つるり。ころん。白い四角が床に落ちた。

「…笑うな」

背後の忍び笑いを睨みつける。ごめん、と謝っているんだか分からない声音で返答があった。全く。こいつは真面目なんだか不真面目なんだか分からない。

「…」

視線を背中に感じる。緊張で肩から先が強張るが、不思議と嫌ではない。なぜだろう。石鹼を手の中で回す。大きな泡が数を増やすごと小さくなり、ねっとり濃い泡は雲のように空虚に白い。僕は今まで、こんなに丁寧に手を洗ったことなどない。見られることは、そういう付加価値を持ち合わせているのだ。

ジャア―、と勢いの良い水音。そこに両手を差し入れる。無慈悲に冷たい。しかし温度を失い指先が今は心地よい。

「もう、流すの？」

「何だ？ もうキレイになったろうが」

両手をぱらぱら広げるが、伊奈帆は不服そうに口を尖らせた。

「綺麗だけどね」

「？」

そっぽを向いた視線の先を追う。かび臭いベッド。足の方。黒々とした溜まり。それは血。血のあと。あれは僕の血ではない。伊奈帆の血でもない。

「君の手がさ。石鹼を泡立てる手の方が、綺麗だった」

こんな状況で。

「お前、馬鹿だろう」

伊奈帆は照れくさそうに頭を掻いた。

「ねえ、手を握つてもいいかな」

床には温度を失った人体。鉄を擦った濃い臭い。広がり切つて、今は固まりつつある。

「……馬鹿だな。本当に」

それで笑える僕も馬鹿か。



冷蔵庫の中に、皿があった。そのこと自体は意外でも何でもない。予想された事態だ。しかし、皿の上のものに僕はかすかに刮目した。

字のない手紙。というか、メッセージ。

紙は無いんだ。ペンもない鉛筆も。だから僕は今が何日目かも曖昧だし、昼か夜かも分からない。窓もカレンダーも無いから。だからこの皿の上の置き土産は、僕を驚かせるのに十分な威力を持っていた。

椅子に座る。僕の視線は皿に注がれている。一心不乱。という言葉があるけれど、そんな感じ。人間っていうのは大体において目が二つ備わっているものだけど、僕には目が一つしかないんだから。だから一心不乱も、二倍くらい効果があるような気がするな。

さて。

どういう意味だろう。皿の上に盛りつけられた、冷えて固まったこの。

くう、と胃が鳴った。食欲など覚えることに吐き気をもよおす。息を吐く。息を吸う。僕の左目は皿の上。花びらのように散る血痕と。

青白く美しい眼球。



眩しい。開こうとした瞼を固く瞑る。玉の残像が網膜に焼き付く。数は九。

なんだ。僕はまだ死んでないのか。

重く鈍い痛みを中心は僕の左前頭部。右目のフォークスを上下左右に動かすと、包帯らしい白い布と金属のスタンドから吊り下げられた赤と透明の液体が確認できた。処置をしたのは誰だろう。この場所の意味は何だろう。迅速かつ的確な治療を施され、のうのうと横たわる僕という存在は一体どうしたものだろう。

台所。冷やされた料理が目の前に。数日続いたもう一人からのメッセージだ。存在証明のようなもの。僕は毎日それを食べた。卵の料理。米の料理。野菜と肉の料理。麵の料理。皿はそのまま机に置いた。片付けられたかどうかは知らない。

赤い調味料で味付けされた麵を食べた。僕は右手にフォークを持っていた。どうしてそんな衝動に駆られたのかは、今となつては分からない。僕は三又のフォークを左目に突っ込んだ。ぐりんと眼窩を一周し、ぶちぶち肉や血管、神経を引きちぎり。潰さず形を保ったまま、上手く取れたはずだった。

その後、どこまで意識を持続できたか分からない。気がついたら、ここで寝ていた。痛みは酷いが、安らかな心地だ。いや、少し違うな。痛みがあるから安堵する。今なら死ぬように眠れる気がする。

一つ開いた瞼を閉じた。視界は闇の中。つられ思考も。意識を手放すことがこんなにも心地よいとは。

途切れる寸前。扉の向こうに思いを馳せる。

あの目は、もう一人に届いているだろうか。

Canary 3

唄を忘れた金糸雀は 柳の鞭でぶちましょか
いえ いえ それはかわいさう

宵闇の銃声。

グニヤリと崩れ落ちた身体の下からスレインは這い出す。人ひとりの肉体なのにやけに重いと苦勞しながら。

「怪我はない？」

「僕にはない」

変な会話だ。

伊奈帆は胸のホルスターにハンドガンを仕舞った。煙たさと息苦しさに喉が渇く。誤魔化すように鼻から深く澱んだ空気を吐き出した。

「血がついてるよ」

やっと直立したスレインが自分の体をあちこち見下ろす。これだけ暗くても、赤黒い体液と白い皮膚の境界は鮮明だ。

「僕のじゃない」

それはさつき聞いたよ、と伊奈帆が視線を独房の壁に視線を送った。

「洗ったら」

配管が剥き出しの洗面ボウル。蛇口を捻り水音が発生した。

手を洗うスレインの横顔を、伊奈帆は壁にもたれて眺めた。生臭さと硝煙が鼻を刺す。手に受けた反動が生々しい。何人目だ。最初は数えていたがもうやめた。少なくとも、銃で殺した人数は戦時中より戦後の方が遥かに多い。無言でささくれ立った気持ちをやり過ぎ、人を殺すというのは嫌なものだ、と彼は考える。

何かが落ちた。

足元に転がってきた白い塊を拾う。スレインの手が伸びる。

「落としたよ」

砂浜で拾った貝殻のように力を加減し乗せる。まだ赤く汚れた手のひらに。

「…笑うな」

「いや、だってさ」

可笑しいことなど何も無いのに。二人でいると何とか笑える。人を殺した後でさえ。始まりの光景は、闇に水音とシャボンの香り。



何度やっても上手くないかない。途中で眠ってしまうのだ。

僕はあの眼球を前にした時から、扉の前を定位置に決めた。もう一人がいるだろう閉ざされた扉。最初、思い切り叩いてみた。痛いだけだった。次に、フライパンで叩いてみた。凹んだのは鉄の縁だった。出刃包丁を振り下ろしてみた。傷一つつかず、毀れた刃で足の裏を切った。他にも色々試してみたが、どうにも開かない壊せない。ならば開くまで待とうと扉の前に陣取った。しかし気が付くと白い部屋にいて、毛布

をはらいのけ床に降りると完全に閉じ込められている。何らかの働きかけがあるらしい。ガスか電極か、それともつと別の方法か。

無駄なあがきも何日目か。もう一人の様子は知れない。石鹼は減っていない。冷蔵庫の中に変化はない。前みたいな分かりやすい痕跡は全く無くなった。僕はバスルームとダイニングの微細な変化を探すが、僕が触ったまま据え置かれている。石鹼も、シャンプーも、冷蔵庫の中のミネラルウォーターのボトルの向きも。

死んだのだろうか。あの目はどういう意味だろうか。そればかり考える。

何を伝えたかったのだろう。あの青い目の持ち主は。

○

A

00001000open

10002400close

B

00001200close

12002200open

經過

No.20

A 覚醒。

B 特記事項無し。

・

・

・

No.13

A 実験棟に移送。

B 特記事項無し。

No.12

A 自傷行為。左目。ICUにて緊急手術。

B 特記事項なし。

No.11

A 不眠。催眠剤を投入。

B 特記事項無し。

No.10

A 不眠。催眠剤を投入。

B 特記事項無し。

・

・

・

No.7

A 特記事項無し。

B 特記事項無し。

No.6

A 特記事項無し。

B 特記事項無し。

No.5

A 食事○ 水○

B 食事○ 卵、茶

※経過は良好。睡眠、食事等不足あれば特記。

No.4

A 食事○ 水○

B 覚醒。

No.3

A 食事× 水○

B 実験棟へ移送。

No.2

A 食事×

B 経過は良好。

No.1

A 実験棟へ移送。健康状態は良好。

B 左眼窩よりアナリティカルエンジンを摘出。計画に則しシステムに組み込む。



あいつだ。あいつが見てる。あの。…あいつって、誰だ？

バスルームで振り向く。壁があるだけ。誰もいない。違う。それは違う。いる。見えないけれどいる。僕からは見えない。向こうからは見えている。この感じ。空気が目になったような不気味な気配。熱い湯を浴びていながら粟立つ肌を乱暴に擦る。怖い、のだろうか。僕は。死にたいくせに怖いなんて、我儘だと自嘲する。

ザーーーーー……。

バスタブで跳ねる水音。今この音が消えると、僕はきつと立っていられない。酷い立ち眩みをする。左目の奥が引つ張られるように痛い。聴覚が研ぎ澄まされる。呼吸が速く浅くなる。定まらない視点。現実から乖離する僕の認識。

身に覚えが、ある？ 前にも、同じようなことが…。

ぼこぼこ音を立てて頭上から不規則な水量の湯が降り注ぐ。故障だろうか、なんて考えられない。何か意味がある。意図がある。このシャワーノズルの円形。無数の穴の

向こう側には誰かいる。僕を知っていて、僕を見ている誰か。

「…」

見る。見る。湯の放出が細く一定になる。そして止まった。ぽたり。ぽたり。びしょ濡れで、夕立ちの後の子どものように立ち尽くす。

ぽたり。

そうして極小の闇から出るのは湯ではなく。

『スレイン』

無数に重なる知らぬ声。

Canary 4

唄を忘れた金糸雀は

IS



湯呑に口をつけた途端、背と肩が跳ねた。ソファに並んで座った横顔は口をへの字にした顰め面。熱かったらしい。

「猫舌？」

「ネコジタ？　なんだそれ」

ふうふうと薄緑の水面に息を吹きかけつつ、スレインが横目で聞いた。熱いものを飲み食いできない舌の事だよ、と伊奈帆が説明する。極秘施設でこの温度を摂取することは無かったろう。もしかしたら火星でも。

「変な言葉」

両手の中の湯呑からは、湯気がゆらゆら立ち昇っている。熱すぎたかもしれない。

「火傷した？」

口の中から、放っておいても治るだろうが。スレインは伊奈帆に顔を向けてべえ、と舌を出した。味蕾が少しだけ白い。でも、これならまあ大丈夫だろう。

「…どうだ？」

大真面目な顔で聞くものだから、なんだか可笑しい。

「大したことないよ」

お茶の香りが湯気からした。湯気の方こうで君が笑った。僕も笑っていただろう。そつと口に含んだ。少し苦くてとても熱い。

二回。陶器が木目に足音を刻む。間で触れた指の温度は同じくらい。握る。握り返される。強く。引く。苦い味。ぷつぷつした先の温度は、君の方が熱かった。

唄を忘れた金糸雀は

象牙の船に 銀の櫂

月夜の海に浮べれば

わすれた唄をおもひだす

Canary

発行日 2025 年 6 月 11 日

著者 ミュー

<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
